

東京農業大学 拓友会ニュース

第29号・2013年発行

発行所 **東京農業大学拓友会**

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
TEL: 03-5477-2404 FAX: 03-5477-4032
e-mail: takuyu@nodai.ac.jp
http://www.nodai.ac.jp/int/original/about/index.html

第55期総会および懇親会のご案内

第55期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

今年度も収穫祭期間中に開催します。数々の特別イベントも計画されていますので、万障お繰り合わせの上、多数ご出席下さいますようご案内申し上げます。

なお、平成25年の収穫祭は11月1日(金)より11月3日(日)に開催されます。

総会

1. 日時 平成25年11月2日(土)
午前11時より12時まで
2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科
共通利用室
3. 次第 (1) 一般経過報告
(2) 議事
 - ① 第54期事業報告
 - ② 第54期決算報告
 - ③ 第54期監査報告
 - ④ 役員改選
 - ⑤ 第55期事業計画案
 - ⑥ 第55期予算案
 - ⑦ その他

懇親会

1. 日時 平成25年11月2日(土)正午より
2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科
共通利用室
3. 会費 4千円
(配偶者、子供の同伴歓迎致します。配偶者および子供は、一人につき2千円)どうぞ皆様お越しく下さい。なお、懇親会のみ参加も歓迎します。お問い合わせはこちらに連絡をお願いします。

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学国際農業開発学科 志和地 弘信
Fax: 03-5477-4032 E-mail h1shiwac@nodai.ac.jp

ホームカミングデーをご存知ですか。

ホームカミングデーは「卒業生と大学との絆を深める機会」として企画され、今年で13回目の開催でした。これまでは収穫祭期間中に開催されていましたが、平成23年度より独立して開催されています。平成26年度のホームカミングデーは6月21日(土)に世田谷キャンパスで開催の予定です。詳細は農大のホームページに掲載されますのでご確認ください。卒業生の皆さんどうぞお越しく下さい。

創立125周年にむけての寄付金のお願い

東京農業大学は、明治24(1891)年、徳川育英会の育英費農業科として創設されました。平成28年に創立125周年を迎えるにあたり記念事業を実施することになりました。今後、本学が国際的な教育機関としての機能を一層高め、世界の農学の拠点大学として飛躍することを目指し、「東京農業大学国際センター」を建設いたします。これらの事業遂行のためには、14億円の資金を予定していますが、その内の一部を皆さまからの募金を仰ぐ計画としております。各界で活躍されておられる校友各位、在学生の保護者、本学の発展に深いご理解を頂いている方々、ならびに教職員の皆様には、何卒本事業の趣旨にご賛同頂き、格別のご支援、ご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

お問合せ先

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学125周年記念事業募金係
電話: 03-5477-2776・Fax: 03-5477-2608 E-mail: bokin125@nodai.ac.jp

拓友会会長就任挨拶

拓殖8期 長尾 文博

昨年11月の総会にて、会長に就任しました。1963年、農大に入学してから早くも半世紀が過ぎました。卒業後は、微力ながら拓友会の代議員、副会長、幹事を務めてきました。一方、本学科は、専門部拓殖科、農業拓殖学科を経て、1991年に国際農業開発学科に名称変更し、2006年に学科創設50周年を迎えました。拓友会は、1984年に再発足し来年で30周年を迎えます。卒業生は、約8,000名を超え、拓友会の役割の大きさとさらなる発展が期待されていることに改めて会長としての重責を痛感しております。

拓友会ニュース、第19号に大川前々会長が下記の抱負を述べられていました。

- ① 年一回の総会への参加者を増やす。
- ② 会員相互の情報交換を組織立てて行う。
- ③ 農大校友会組織を利用して拡大し、拓友会の農業法人を設立する。
- ④ 拓友会OB・OGの蓄積したノウハウ・知識で後輩にエールを送る。
- ⑤ 年代ごとのOB・OG会を活発に開催し、更に交流を深める。

上記に関しては、拓友会の活動(①、②、⑤)を活発化し更に交流を深めることを課題に取り組みながらも、なかなか成果が出て来ていません。収穫祭には、多くのOB・OGが研究室、運動部・サークルで先輩・後輩のつながりをベースとした親睦会に参加しています。今後は、農大勤務のOB・OGをお願いして拓友会の総会や活動への参加を奨めて頂く



のが現実的な最善策かと考えていますのでよろしくお願い申し上げます。

農業法人(③)については、農大内の「株式会社 じょうえつ東京農大」や「(株)メルカード東京農大」との共同活動が可能かどうかを検討したいと考えています。私の提案は、農大関係のNPO・NGOとの協力・連携を深めて、会員の参加・協力による学生の海外実習や留学生への生活支援、国内の農家ホームステイなどの手助けをする機会を構築することです。後輩へのエール(④)は、拓友会の講演会(年一回)と特別講義が既に行われています。これらの懸案事項については、今後とも幹事会にて具体的な内容を討議しながら取り纏めていく所存です。

最後に、校友会ブラジル支部では、「(仮名) ブラジル農大会移住史」の編纂を開始しているようです。皆様のご支援・ご協力をお願いする次第です。また、諸先輩方、幹事、会員の皆様のご指導とご協力をお願い申し上げます。簡単ですが会長就任の挨拶とさせていただきます。

「アマゾンに魅せられて」

農業拓殖学科5期 山口 吉彦

私は自然が大好きで、世界の秘境アマゾンに憧れを抱いていました。少年の頃からのアマゾンへの夢を抱いて、東京農業大学の農業拓殖学科に入学したのは1960年でした。学生時代には、アマゾン探検誌やイギリスの博物学者ヘンリー・ベイツやアルフレッド・ウォーレス等の本を読み耽り、その度に私の中のアマゾンへの夢は果てしなく膨らんでいきました。

農大卒業後、フランスのボルドー大学で留学生活を送っていた際、著名な人類学者レヴィ・ストロースが収集したアマゾン・インディオの民俗資料をパリの博物館で見て、まるで雷に打たれたような感動を覚えました。それ以来、民俗学に興味を持ち、リ

ヨン大学に転学し、世界の辺境に住む少数民族を訪ねて、80数カ国を歩きまわりました。

忘れられないサハラ砂漠での苦い経験もありました。熱砂の砂漠で強盗に襲われ、お金や持ち物は全

株式会社 タナカ通商

真珠美の創造

代表取締役 田中博也

真珠と共に50年 何なりと
お気軽にお問合わせ下さい

〒104-0061 東京都中央区銀座8-10-8
銀座8-10ビル3階

TEL(勤務先)03-3571-3088 FAX 03-3571-3089

TEL(自宅)03-3322-1994

E-mail: tanaka.h@sea.plala.or.jp

て、水筒まで奪い去られるという事件に出くわし、それから3日3晩、厳しい砂の世界、死の世界をさまよいました。4日目に、たまたま通りかかったキャラバンの人達によって救われました。あの時ほど“水と緑の世界”を渴望した事はありませんでした。そして、アマゾンへの夢が再び強烈によみがえってきました。

その後、ヨーロッパ・アメリカの博物館、研究所などで、アマゾンに関する本や文献をむさぼるように読んでまわりました。マヤやインカの遺跡を訪ねたりしながら徐々にアマゾンへの道をたどりましました。アマゾンに足を踏み入れてから40年。広大なアマゾン地域で生物学や民俗学の調査と研究、それに資料の収集を長年やってきました。まさにアマゾンの魅力にとりつかれ、青春をかけてきました。

今、私は思い出します。コバルト・ブルーの光沢をした「森の妖精」モルフォチョウが、アマゾンの太陽に照らされて、キラキラ輝く時に感じたあの胸のときめきのことを。一年中、花が咲き、果実が熟す木々の頂で飛び交う極彩色のコンゴウインコのことを。時には恐ろしい一面もアマゾンにはありました。密林を跋涉していて、足元からブッシュマスターやガラガラヘビといった毒蛇が飛び出したり、5メートルにもなるアナコンダが水辺でアタックしてきて、心臓が止まるほどゾクッとしたことも再三あ

りました。目的地のインディオ部落にたどり着いても安心というわけではありませんでした。初めての部族に接する場合には「未知との遭遇」にも似た緊張感が伴い、彼らのタブーを犯さないように慎重に行動しなければなりませんでした。でも、いったんインディオ達の警戒心が解けると、彼らは遠方からの客人を温かくもてなしてくれました。風俗、習慣はまるで違っていても、この地球上に住む同時代の人間同士が濁り酒を酌み交わして談笑していると、まさに「人間の原点」に立ち返ったような気がしてくるのでした。

現在、私は鶴岡にある自然と民俗の2つのアマゾン博物館の館長をやっています。アマゾンのインディオ達は沢山の事を私に教えてくれました。大自然の中で、自然と調和を保ち生態系のバランスを崩さずに生きるインディオの生活の知恵が、機械文明に侵され、人間性を喪失しつつある現代人に大きな驚きと感銘を与えてくれました。

アマゾン — この現代版「エデンの園」を失樂園にさせてはいけない。それが私の心からの願いであり、先住インディオからの地球へのメッセージでもあります。



今年度の拓友会講演会で開発学科の在学生への講演の様子

住まい作りのトータルプランナー
宅地建物取引業 千葉県知事免許(7)第 6298 号

 南房商事株式会社

千葉県茂原市高師 57 番地 電話 0475(23)3251(代表)

地域一番の品揃え **花と緑**
TABLE GARDEN CENTER 契約農家直送、だからいつでも新鮮!!

テーブルガーデンセンター

TEL 045-935-4187(代)

〒226-0023 横浜市緑区小山町 611-3

代表取締役社長 篠原 敬一(拓殖20期)

釜津家農大3代伝

拓殖3期 釜津 紀之

私は父が東京農大を卒業して東金女学校で教師をはじめたころ、八鶴湖のほとりにある借家で生まれました。当時の東金女学校の校長は、沼田千葉県知事の父上第9代沼田亀之助校長と、後に千葉県教育委員長山下天皇と言われた第10代山下重輔校長だったそうです。

それから時を経て私が小学校に入学する前には、父は東京湾から小糸川を4km遡った房総半島の山間部にある上総農学校に転勤しました。初めは借家住まいでしたが、やがて官舎に住むようになり、ここは実習用の桑畑や水田、温室、山羊、豚、乳牛、蜜蜂に囲まれていましたが、何故か鶏舎だけが無いのが不思議でした。土手を下りれば小糸川が流れ、夏には水遊びや一年中魚釣りの出来る自然に恵まれた中で育ちました。

この上総農学校には東京農大卒の先生が何人もいましたので皆に可愛がられ、よく宿直当番の先生から遊びに来るように声が掛かり、農産加工の時にはパンが焼けたので食べに來い、運動部の合宿が始まれば今夜ライスカレーのごちそうがあるから食べに來いと生徒が呼びにきたりしました。父は私が学校に顔を出すのを嫌いましたが、そこは3男坊の特権で校内を自由に歩き回りました。

私は小学校の2年の時に赤痢に罹り、死ぬ一歩手前から奇跡的に生き返りました。父はそれ以来いつも病弱な私を心配して、山羊を連れてきました。うまく育てられず、とうとう山羊の乳を飲むまでには至りませんでした。次にチャボの番いをもらってきてくれたので、兄に手伝ってもらい、小屋を作ってチャボを飼い始め、ヒヨコを孵化してチャボを増やすことに熱中するようになりました。中学の頃には校舎の工事があり、解体業者が余った資材で人間が住めるような立派な鶏舎を作ってくれたので、20羽のニワトリを飼って玉子の生産を始め、農大に入学するまで続けました。

高校は父のいる上総農業高校に進学するつもりが、父の反対で木更津市にある高校に進学しましたが、元政治家の浜田幸一氏と同窓です。高校では生物部に入り、先生と房総の山々に植物採集に出かけたのが楽しい思い出です。初めて植物採集に出かけて帰宅した夕方、待っていた父が新聞紙を使って押し花をするのを手伝ってくれ、押し花をした植物が乾いた頃には、台紙に標本を貼り付ける時の注意やラベルに植物名を書くのを手伝ってくれ、植物辞典の使い方を教えてくれました。これは私が植物に興味を持ったのが嬉しかったからだと思います。それから3年の夏休みに入っても受験勉強もせず相変わらず生物部の仲間とテントを担いで尾瀬沼に水パショウを見に行ったりしていましたので、家族も先生も大変心配していたようですが、これを見かねた父が農大に行くことを勧めたので、調べてみたら海外に行ける農業拓殖学科があったので農大進学を決めました。私は小さい時から船に乗って外国に行きたい夢があり、小さいときに読んだイタリアの作家エドムンド・アミシスの書いたクオレの中にある“母を訪ねて3千里”の舞台、アルゼンチンが強く印象に残っていました。

農業拓殖学科3期に入学してみると、茂原の海軍航空隊跡地に出来た兵舎や戦闘機の格納庫が残る松林に囲まれた広大な実習農場と教職員寮、学生寮、校舎、食堂、浴場が完備され、畜産学科には牛、馬、豚、羊、山羊、鶏、うさぎが飼育されていて拓殖学科も最高の環境でした。畜産学科の鶏の研究室に入り、研究室の先輩や、石原・小川両先生に指導を受けて国外に出ても困らないよう養鶏技術の修得に努め、海外に出て自分の養鶏場を持つ夢に運命を託しました。恩師の杉野先生、小野先生からは私の体が丈夫でないのを心配して日本に残るよう強く勧められましたが、私の海外に出たい意思が固いを見て、アルゼンチンに住む日本人が日系人の新職業分野開拓のために作った孵化場で養鶏技術者を探している話を持ってきてくれたので、迷わずアルゼンチン

定期借家一括払いで金利よりお得に!
7年一括払い=3%OFF・5年一括払い=10%OFF

間取り変更住替え自由な街 **生涯賃金** Welcome to **TomaTown**

人材急募⇒ 高収入・高スキル・高待遇

耕作のヴィラが川口にお手頃家賃でやってきました!

La villa chez Kato 2012年4月竣工
コンパウンド形式のオートロック
高原のような白樺のパティオ **只今満室**
設計・監理・企画Owner 加藤 耕誠
ソーラーパネルも取り扱っております
お気軽にお声掛けください



日本唯一カーシェアリング付賃貸マンション
TOYOTAハチロクGTリミテッド&
スベイドが新たに加わりました
敷金・礼金・ZERO
学割! キャンペーン
1R&1LDKの家賃が月々1万円引き

Nack5のCMでおなじみ
「安心のわが家におかえりなさい」

川口 賞賛 **UNI-HEARBEST**

宅地建物取引業許可番号 埼玉県知事(2)第20791号

ユニ・ハーベスト株式会社 一級建築士事務所
一級建築士事務所登録番号 (1)第9606号
加藤耕誠建築デザイン研究室 <http://www.e21038.jp>

本社 埼玉県川口市電通ヶ谷4-17-5TKC加藤ビルプレーシェ
デザイン事務所 Phone. 048(288) 0848(F) FAX 048(288) 0868

加藤耕房グループ 関連法人 CEO(拓殖30期) 加藤 耕誠
CFO(拓殖31期) 加藤 深雪

Beauty Jewel LTD 加藤耕房有限会社
有限会社 テラ・アクア総合研究センター 加藤農園

ンに行くことにしました。これで製茶技術者として渡航する小川忍に続いて3期生2名がアルゼンチンに行くことになりました。在学中3年間で卒業に必要な単位を取った私は、4年目と卒業後1年間は、岐阜にある後藤躰卵場とエンヤ躰化場で実習しながらアルゼンチン渡航に備えました。

東京オリンピックの前年1963年3月3日横浜港出帆のあふりか丸には、800名前後の南米移住者が乗船していましたが、この中には希望に胸膨らませた農大卒業生が私を含めて4名いました。あふりか丸は北米経由の南米定期航路船です。この農大生4名の略歴を下船順に記しておきます。

入江光瑞 拓殖1961年卒 鳥取出身 1963年3月 ロサンゼルス下船 北米永住

内山康夫 造園1960年卒 千葉出身 1963年4月 サントス下船 約1年後日本に帰国

角忠三郎 農学1961年卒 福岡出身 1963年4月26日 ポルト・アレグレ下船 伯永住

現校友会会長三好吉清氏と同期生、又、同船されていた敏子夫人は戦後の名作映画で藤山一郎の歌が大ヒットした「青い山脈」に出演した杉葉子さんの実妹。

さて、船がサントス港に着いたら同期の沖真一、2期の近藤先輩が出迎えに来てくれて、サンパウロから70km離れたアチバイヤの安田農場に案内されて4泊世話になりましたが、近くの農大生のいる農場や養鶏場も案内してもらい大変参考になりました。次のポルトアレグレ港では角忠三郎夫妻はじめ、数家族の移住者が下船しました。後にはアルゼンチンのガルアペ移住地に入植する北海道の炭鉱離職者3家族と単身移住者の私だけになりましたので、船内が急に静かになった感じでした。

1963年4月27日土曜日早朝、小雨降るブエノスアイレス港に到着、ソール・ナシエンテ躰化場の池田喜城氏が出迎えてくれました。池田さんとは度々手紙のやり取りをしていたので初対面とは思えない感じでした。その夜はブエノスアイレス市内の港の見えるアパートに一泊しました。翌日はブエノスアイレスから30km離れたホセ・パス市で花卉園を経

営する鈴木等宅に移動し、昼食にアサード(アルゼンチン式バーベキュー)をご馳走になりながら、農大の大先輩杉田俊夫氏、渡辺諒氏の両名を紹介していただきました。

その日の夕食後、鈴木さんは「農耕と園芸」を出してきて、上総掘りで掘った井戸から自噴する井戸水を温室の屋根から流して、暖房する水かけ温室の図面と写真を示して、これは君のお父さんかと尋ねられたのにはビックリしました。上総農業高校で水かけ温室でメロンの早期栽培をしているのを見ましたが、まさか「農耕と園芸」誌に掲載されていたとは知りませんでした。日本の反対側にあるアルゼンチンで父の書いた記事に注目している人に会えたのは驚きでした。鈴木等さんは水かけ温室を冷暖房に利用したいとの事で父に詳しい資料を送ってもらった事があります。ブラジルにいる同期の沖真一は茂原時代、我が家(官舎)に泊まって自噴する上総掘りの井戸や水かけ温室を見て廻り、今でもその写真を保存しているそうです。この日から1ヶ月鈴木さん宅にご厄介になりながら、私と池田さんの税関通いが始まりました。名古屋の養鶏之日本社の高橋徳次社長のご厚意で池田さん宛てに躰卵機や養鶏器具を携行荷物として運んできたのですが、通関に非常に手間取ったわけです。

いよいよブエノスアイレスから600km離れたラファエラ市にあるソール・ナシエンテ躰化場に着任した私を待っていたのは、北米のハイブリッド種の産卵鶏デカルブを導入するという朗報でした。北米から届いた種卵を躰化、鑑別して2000羽の種鶏を育てあげ、ヒヨコの生産、販売の一手手前まで順調に行きました。しかし、ソール・ナシエンテ社はデカルブに支払う種雛代金を用意できず、結局隣町の躰卵場が買い取ることになり、会社はデカルブから育成費をもらってお仕舞い。失望して日本に帰ろうかと思いましたが、帰る船賃もないので兎に角契約の2年間は頑張ろうと思ひ直し、ケージに飼育していた採卵鶏に人工授精をして、ヒヨコの生産を続けました。そのうちに日本人が鑑別ビナを売っているとの評判が伝わり、近隣の養鶏家が買いにくるよう



株式会社 ムラカミ シード
MURAKAMI SEED CO.,LTD

本 社

〒309-1738 茨城県笠間市大田町341
TEL 0296-77-0354 (代) FAX 0296-77-1295
<http://www.murakami-seed.com>

ムラカミシード水戸研究農場

〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332 (代) FAX 029-259-6226

代表取締役会長 村上典男(拓殖23期)

ガーデンショップ花みどり本店

〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

村上 登(拓殖26期)

村上忠義(拓殖29期)

になったので、支配人一家、従業員、私と鶏が何とか食べて行ける収入を稼ぎ出しました。そんな時、100km離れた街の孵卵場がカナダからシェーバ種を導入する情報が入りましたので、在来種の採卵鶏のヒナ販売をやめる潮時だと考えるようになりました。これは池田隆政氏が私に日本の養鶏家の為、外国鶏を日本に入れたのだと云う言葉がいつも頭にあったからです。

1961年当時、日本の養鶏業界で国産鶏か外国鶏かで大論争があり、池田隆政氏が日本人で初めてアメリカ鶏エムス・イン・クロスの導入、販売を始めたので国産鶏愛護者から強い非難を受けました。私は国産鶏の育種のリーダー後藤孵卵場で実習中でしたので、正月休みを利用して岐阜から岡山の池田牧場にエムス・イン・クロス鶏を見に行きました。幸運にも池田氏とお会いでき、厚子夫人が点てて下さったお茶をいただきながら氏の話の聞くことが出来ました。この時、池田氏が日本の養鶏家の利益の為、安定した能力を誇る外国鶏を入れたのだと熱っぽく語ってくれました。当時は日本の各県の種鶏場で365卵鶏(1年間毎日卵を産む鶏のこと)が出されていて、日本は非常に高い技術を誇っていました。反面、北米・カナダのハイブリッド種は1年間20ダースの卵を産むように育種され、個体間の産卵、卵重のバラツキが僅かなので、多頭飼育する時に安定した経営が可能でした。今の日本の養鶏界を見れば養鶏家の利益の為、非難されながらも外国鶏を導入した池田氏に先見の明がありました。

余談ですが、プエノスアイレスに訪問されたことのある秋篠宮殿下は鶏に関心が深く、これに関する著書もあり農大にも時々来校されるそうですが、これも池田隆政氏や農大の無翼鶏作出の近藤教授、鶏の血液型研究の鈴木教授の影響があったのかなと想像しているところです。

話しは戻りますが、結局ソール・ナシエンテ孵卵場は居抜きのまま売却に決まり、借金返済の目途もついたので私は安心して辞めることが出来るようになりました。この頃、コルドバ市で大城吉義さんを筆頭に10人以上の日本人養鶏家が活躍を始めてい

ましたので、池田喜城さんは日本人の新職業分野開拓の役割を果たすことが出来ました。

2年間無給で過ごした思い出深いソール・ナシエンテ孵卵場とラファエラ市に別れを告げた私は、北米のプロイラ育種メーカー「COBB」に入社しました。本社ボストンから来た定年近い技術者が常駐し指導していましたが、1965年の春、降雹で輸入している100日分の原種が全滅する事故があり、種雛の供給に支障が生じ、リタイヤ間近の彼は真っ青になりました。その彼に種雛を強制換羽にかけ、種卵を生産する方法を伝授してやり、これがうまく行き計画通りの種雛生産を達成することが出来たので、1年後の1966年12月には当時でシボレーの新車を買うだけの高給を払ってくれました。その後私は肝炎に罹り予後が良くないので、1969年12月日本に治療のため帰国しました。この時父は上総農業高校を定年退職して、大貫町に建てた家に住んでいましたので、我が家でゆっくり静養することが出来ました。上総農高の官舎の庭に私が植えたメタセコイアもここに移植してあり、大きく育っているのを見て感無量でした。

それから日本で治療して元気になった私はマルコス・パスにJICAが造成した第4移住地に養鶏用の土地を確保してあったので、アルゼンチンに帰って念願の養鶏場を始める準備を開始しました。ところがアルゼンチンを留守にしている間に養鶏事情も変わり、採卵養鶏を始めるには時期が悪いと判断した私は、方向転換して今度は養蜂を始めることにしました。

小さい時赤痢に罹り、医者から「もう助からない」と見放された私は、蜂蜜をなめて生き返ったという話を母から聞いて育ったので、自分自身の健康と実益を兼ねて1971年の早春、50群の蜜蜂を購入して菊池金助さんや近くのポーランド人の養蜂家に助けられながら蜂飼いを始めました。蜂飼いを覚えローヤルゼリーの生産も軌道に乗ったころ、良縁があり、頭が良くて器用で健康で美人の妻を、1000km離れたポサーダス市から迎えることができました。ところが何年経っても子供が出来ないので、冗談でよく



(株)メルカード東京農大



<http://www.ichiba-n.co.jp>

TEL: 03-5477-2250

FAX: 03-5477-2251

〒156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1

ビタミンCの王様「カムカム!!」是非お試しください!

釜津のローヤルゼリーは効かないのではないかとからかわれる始末でした。漸く結婚5年後に第一子の長女に恵まれましたので、子供の将来とローヤルゼリーや蜂蜜の販売と妻の実家に行くのに交通便利なエスコパールに長女が1歳になる前に越して来ました。

エスコパールで長男、次男が生まれ、長男が高校生頃、東京農大のバイオビジネス学科からアルゼンチンで農業実習等の為、研修生の来亜が始まりました。来亜した研修生を我が家にも泊めて世話をするようになったので、長男は学生に農大に行こうと誘われるようになり、日本語が苦手な長男は逃げ回っていました。ところが、来宅した研修担当の農大の稲泉先生と英語で話すうちに気が変わり、農大に留学すると言い出したので私を慌てさせましたが、特別留学生としてバイオビジネス学科に入学することが出来、2004年に無事卒業しました。これで私達は親子3代揃っての農大生となりました。農大留学で日本に行ってから12年目になる長男ウーゴが世界同時不況の真只中の2011年12月にアルゼンチンに帰ってきましたので、妻が喜び久しぶりに家族5人揃いました。長男が想像していたよりアルゼンチンの状況が悪く、目下暗中模索ですが、そこは農大生、頑張っていますのでこれからの活躍を期待しているところです。長女カロリーナは英語の先生、次男エリックは私の後を継いで雛鑑別の仕事、妻朋子は来亜するバイオビジネス学科の研修生に美味しいアルゼンチン料理を食べさせるのを楽しみにしている毎日です。

続いて今回皆様には是非伝えたい父に関する事を記したいと思います。群馬県藤岡市藤岡に生まれた父の釜津馬之助は教育者としての道を歩むべく、東京農業大学専門部農学科を昭和4年に卒業してから千葉県立安房農学校教諭として着任以来、38年間の長きに亘り実業学校で子弟の教育に務めました。特筆すべきことは昭和17年に千葉県立上総農学校に着任以来、教諭、教頭、校長として奉職、昭和42年3月に退職するまでの26年間同一高校に連続勤務したこと。私学出身では初めて千葉県立高校の校長に就任したこと。高等官だった父は叙勲の際、皇居で昭和天皇に拝謁できたのが格別嬉しかったようです。

定年退職3年後の昭和45年父の教え子1300人が基金を集め、上総農業高校内に顕彰碑と記念庭園を造ってくれました。この後には更に驚くべきことがありました。平成10年5月に父は亡くなりましたが、父の死後11年目の平成21年11月、顕彰碑と庭園が再建されたことです。それは転勤してきた代田健一校長(農大畜産科昭和47年卒)が顕彰碑の傷みの激しいのを知らされ、上総農業高等学校同窓会顧

問の青木久夫氏(父の教え子で上総農学校昭和21年卒、農大農業経済学科昭和27年卒、大和事業協同組合理事長)に相談したところ、費用全てを負担するから早急に再建工事に掛かるようにとの指示をくださり、渡邊茂男教諭、風間龍夫教諭の尽力により完成されたものです。上総農業高校創立百周年の前年に完成した黒御影石に刻まれた顕彰碑の文面は当時のものをそのまま再現したもので、正面に「継続は力なり」と書かれ、裏面には次の文面が記してあります。

釜津馬之助先生は、昭和17年春着任以来26年間教諭、教頭、校長として本校発展のために尽力され、全校舎の移転新築及び校庭の拡張をめざし、昭和35年農業高校として県下初の鉄筋コンクリート校舎を建設。また「小糸川の水一滴は七つの海に通じる」、など生徒に多大の教訓を与えられた。

先生は晩年、「継続は力なり」と力説され、地域学徒の希望と視野拡大、根性、忍耐の大切なることを示された。

ここに同窓の有志相成り、先生の業績と遺徳を永く顕彰するために石庭を造る。

昭和四十五年春 釜津先生教え子有志

昭和45年と平成21年の2度に亘って、父の顕彰碑と記念庭園を造ってくれた1300人の教え子と青木久夫上総農高同窓会顧問、代田健一校長、渡邊茂男教諭、風間龍夫教諭の4氏に感謝の気持ちを伝えたくてもアルゼンチンからは遠くて中々届きません。今回拓友会ニュースの紙面をお借りして、この美談を校友の皆様で紹介して感謝の意を伝えたく拙い文を綴った次第です。

この記事掲載にあたり、格別のご配慮をくださいました豊原秀和副学長、三好吉清校友会会長、戸神重美前校友会会長、村藤修亜国校友会幹事に篤く御礼申し上げます。

TA [株] 東京アグリビジネス

TOKYO AGRIBUSINESS CO., LTD.
緑地防除管理・請負メンテナンス・資材販売

代表取締役会長 大橋 邦雄
(昭和49年 林学科卒業)

代表取締役社長 野瀬 忠
(農業拓殖学科18期)

〒252-0302 神奈川県相模原市南区上鶴間2-7-7
TEL 042(744)6237
FAX 042(744)6295

38年間をふりかえって

熱帯作物学研究室 豊原 秀和

私は、平成25年3月末を以て教授職を満期定年退職、7月4日までは副学長職として勤務し、6月の教授会で名誉教授の称号を頂きました。

ふりかえりますと、昭和41年に鹿児島県立喜界高等学校を卒業し、本学農学部農業経済学科に入学しました。しかし、故山崎守正先生にお会いした事で、2年次に農業拓殖学科に転学科をしました。転科後は山崎先生が在籍していた熱帯殖産研究室(現熱帯作物学研究室)に入室し、研究室の教員が研究していたイネ・バナナ・サトウキビなどのお手伝いをさせて頂きました。卒業後数年を経て、農業拓殖学科の実験助手として採用され38年間の勤務を無事終えることが出来ました。これも一重にご指導頂いた熱帯作物学研究室の前身熱帯殖産研究室の故山崎守正先生、故栗田匡一先生、故西山喜一先生、早道良宏先生、菊池文雄先生、藤巻宏先生、太田保夫先生ならびに精神的な支えを頂いた小野功先生、鈴木俊先生、大田克洋先生には心から感謝申し上げる次第です。さらに、大学はもとより学科教職員・卒業生ならびに学生諸君に支えられて、最後まで勤めることが出来た事に感謝しています。

私の大きな転機は、東京農業大学創立100周年の記念事業に採択された「秘境パプアニューギニアに農耕の起源を探る」—熱帯雨林地域に農耕の起源植物調査—の一員として参加したことだと思っています。パプアニューギニアは、日本の真南、南緯0度から10度に位置するニューギニアの東半分、国土の大部分が熱帯降雨林で覆われ、国土面積は46万km²(日本の1.25倍)、大小600を超える島嶼で、第2次世界大戦で激しい戦いを繰り広げた場所でもあり、日本人が10数万人も戦死したといわれています。調査当時は、各地に戦争当時の残骸があり、今では多くの地域に慰霊碑などが建てられています。そのパプアニューギニアに春・夏の休暇を利用して10数回は行ったと思います。私は植物担当

であったため現地で主食となっている植物の調査と農業形態について調査を行いました。

パプアニューギニアは、低湿地以外は殆どの地域で焼畑農耕が行われ、タロイモやヤマイモが栽培されていました。低湿地から標高700mぐらいの湿地にはサゴヤシが自生もしくは栽培され、主食となっていました。低地の湿地以外は、タロイモ・ヤマイモ・バナナなどを主食としていましたが、畑は一面に数十種類の作物を栽培する混作で、まさに自然植生に任せた農法が取られていました。栽培様式は畑の立地条件によって植物の配置が工夫されているのにも興味を覚えました。私が一番関心を持ったのはヤマイモでした。栽培は焼畑で行われ完全な自然農法であるにもかかわらず、大きいことと種類の多いことに強く惹かれました。

ヤマイモが焼畑移動耕作で自然農法にもかかわらず、50kg以上にもなるのを見て、これまでの研究蓄積してきたものをすべて投げ出してもヤマイモについて研究をしたいという衝動にかられました。当時、21世紀は食糧危機や石油の枯渇といったことが話題になっていました。そこで、これからの食糧資源やエネルギー源としてヤマイモを利用出来るのではないかと考え、ヤマイモの研究に切り替えることにしました。それから5年ぐらいは夏期休暇や春期休暇を利用してヤマイモの栽培方法の調査や収集に没頭しました。その間、研究室の多くの学生も参加するようになり、延べ人数では50人以上がパプアニューギニアを訪問したと思います。一方、学内においては、収集したヤマイモの基礎的な栽培方法や肥大のメカニズムについて研究を行い、栽培学的な調査を行ってきました。ある程度目処が立った段階で、サトウキビを基幹産業とする南西諸島の農業の活性化に役立てることは出来ないかと考えるようになりました。南西諸島の主要な農作物であるサトウキビは、最低生産者価格の廃止や国の経営安定生産者価格の廃止などにより、代替作物の導入が必要と考え宮古亜熱帯農場で実証することにしました。南

観光庁長官登録旅行業第1835号 IATA(国際航空運送協会)公認代理店
(社)日本旅行業協会正会員 社団法人海外ツアーオペレーター協会正会員

ふれあいの旅を演出する (株)アルファインテル南米交流

代表取締役:佐藤 貞茂(拓殖15期)
〒105-0004
東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階
電話:03-5473-0541 FAX:03-5473-0540
ホームページ www.alfainter.co.jp
メールアドレス info@alfainter.co.jp
平日9:30~18:30 土曜日9:00~13:00
日・祝日は休み



東京都知事登録旅行業第3-5792号



キックス・エアー・チケット
株式会社 キ ッ ク ス

代表取締役 塩満 仁

〒187-0003
東京都小平市花小金井南町2-17-2-603
Tel 042-458-1180 Fax 042-458-1180
携帯 090-1761-0970
E-mail shiomitu@bird.ocn.ne.jp
E-mail info@kix-j.co.jp

<http://www.kixairticket.com>

西諸島の農業の活性化には、毎年襲来する台風被害に強く、付加価値の高い作物の導入が必要であり、新しい作物を導入するのではなく、現地の人々に馴染みのある作物であることが栽培・普及する上で重要と考えました。これまで海外から収集してきた熱帯産ヤムイモ約100品種を宮古亜熱帯農場に移し、南西諸島に適応する品種、加工に向く品種の選抜を現在も行っています。生産をするだけでは農家の収入源にはならないと考え、付加価値を付けることを思いつきました。単純な発想ではありましたが、ヤムイモで焼酎は出来ないだろうかと考えました。そこで、醸造科学科の中里厚実教授に焼酎原料として利用できないかと相談しました。試作をして貰うと中里先生から、素晴らしい焼酎が出来るとの返事を頂きました。次は、どこで醸造して貰うかが問題でしたが、沖縄県糸満市で比嘉酒造を営んでいる卒業生に依頼を致しました。比嘉さんも試験的に作ってみようかとの返事を頂き、宮古農場産のヤムイモと沖縄本島の農家さんから提供して頂いたヤムイモで、本格的に醸造することが出来ました。それが世界でも初めてヤムイモで醸した「ヤムイモ焼酎・天恵のしずく」です。この商品は沖縄県の品評会において奨励賞を受賞しました。今では多くの方々に愛飲されるまでになりました。また、宮古亜熱帯農場を拠点として各学科の研究者に協力を頂き、ヤムイモ入り麺やパンなどの試作も行っています。

本学は土作り、栽培、加工、栄養分析など様々な専門家が揃っています。多くの研究者が係わることによって、東京農業大学としてのブランド商品を世間に発信できる可能性が無限にあると考えています。このことは、国内だけに限ることではありません。本学は海外に多くの卒業生を輩出しています。海外の卒業生と連携を取り、商品開発や販売などの協力をする事も重要だと考えています。世間では6次産業化が叫ばれていますが、本学は全国の農業自営業者や加工業者、教職員が連携することによって農大ブランド商品を世に出していく環境が整っています。私はこれから残された期間を利用して、国内外の卒業生と連携を取り、農大でしかできない農大マーケットを実現させたいと願っています。

国内外の卒業生が様々な情報を欲しています。特に国際農業開発学科の教員は国内外で多くの情報を持っています。情報を個人の物にするだけでなく、世の中に貢献できるような仕事をしていきましょう。

さて、在職期間中に多くの海外を訪問させて頂き、多くの卒業生や現地の方々に多大なるご協力とご支援を頂きました。これまで調査、研究で訪問した国々は、台湾・フィリピン・タイ・マレーシア・ミャンマー・インドネシア・ラオス・バングラデッシュ・スリランカのアジア地域、ザンビア・ガーナのアフリカ地域、オーストラリア・パプアニューギニアのオセアニア地域、アメリカ大陸ではブラジル・パラグアイ・ペルー・ベネズエラ・エクアドル・メキシコ・アルゼンチンなどで、多くの地域を回り、調査研究し、校友との交流を深めて参りました。特に、ブラジル・パラグアイ・アルゼンチンに移住し、活躍している卒業生のご活躍を見聞き、強く感銘を受けました。今更ではありますが、もう少し早い段階で南米を訪問していたら人生が変わったかも知れないと思っています。それらの国で活躍されている先輩方も高齢化が進んでおり、大学や学科との交流に不安を感じている方々も多くおられます。現在は移住が困難な状況にあり、後継者が少なくなる一方です。先輩方が築かれてきた功績を後進に伝える意味でも、南米との交流は学科として継続して頂きたいと願っています。私は、3月に北伯ペレンにあるアマゾニア農業大学を訪問し、沼田ペレン総領事同席の下、Numazawa学長(日系2世)と協定書にサインしてきました。私は大澤前学長と相談し、これまで協定校は1カ国1大学との取り決めがありましたが、国土が広く、気候や環境も違う国、あるいは本学を卒業して現地で大学に奉職している卒業生がいる場合は、2大学でも良いのではないかと進言してきました。ブラジルではピラシカバ農科大学との協定を結んでいましたが、現地の先輩方にもご理解頂き、アマゾニア農業大学との協定が実現しました。今後はアマゾン地域での研究交流や学生交流などが実現できるよう願っています。また、東南アジアでも本学で育った卒業生が大学の教員や企業家として活躍しています。海外で活躍している本学卒業生との絆を強くし、グローバルな観点で活躍できる人材を養成して頂くことを願っています。

リカ地域、オーストラリア・パプアニューギニアのオセアニア地域、アメリカ大陸ではブラジル・パラグアイ・ペルー・ベネズエラ・エクアドル・メキシコ・アルゼンチンなどで、多くの地域を回り、調査研究し、校友との交流を深めて参りました。特に、ブラジル・パラグアイ・アルゼンチンに移住し、活躍している卒業生のご活躍を見聞き、強く感銘を受けました。今更ではありますが、もう少し早い段階で南米を訪問していたら人生が変わったかも知れないと思っています。それらの国で活躍されている先輩方も高齢化が進んでおり、大学や学科との交流に不安を感じている方々も多くおられます。現在は移住が困難な状況にあり、後継者が少なくなる一方です。先輩方が築かれてきた功績を後進に伝える意味でも、南米との交流は学科として継続して頂きたいと願っています。私は、3月に北伯ペレンにあるアマゾニア農業大学を訪問し、沼田ペレン総領事同席の下、Numazawa学長(日系2世)と協定書にサインしてきました。私は大澤前学長と相談し、これまで協定校は1カ国1大学との取り決めがありましたが、国土が広く、気候や環境も違う国、あるいは本学を卒業して現地で大学に奉職している卒業生がいる場合は、2大学でも良いのではないかと進言してきました。ブラジルではピラシカバ農科大学との協定を結んでいましたが、現地の先輩方にもご理解頂き、アマゾニア農業大学との協定が実現しました。今後はアマゾン地域での研究交流や学生交流などが実現できるよう願っています。また、東南アジアでも本学で育った卒業生が大学の教員や企業家として活躍しています。海外で活躍している本学卒業生との絆を強くし、グローバルな観点で活躍できる人材を養成して頂くことを願っています。



調印式(左から、山中正三北伯分会長、佐藤卓司(拓11期)、佐藤孝吉森林総合科学科教授、沼田行雄ペレン総領事、豊原秀和副学長、Numazawa Sueo学長、Paulo de Jesus Santos副学長、岩井慎一国際協力センタ事務室長



常磐松伯国会館、大島正敬(拓3期)、下條昭弘(拓3期)、豊原、沖真一伯国校友会支部長、岩井、佐藤

国際農業開発学科の動静

2012年度の本学科(板垣啓四郎学科長、足達太郎主事)の動静は以下のとおりである。

2012年		9月	21日 後学期授業開始	
3月	20日 2011年度卒業式(卒業生164名)	10月	4日～10日 農業開発実習(第3組、東京農大宮古垂熱帯農場にて、学生38名、引率:入江憲治准教授)	
	30日～8月26日 「食と農」の博物館にて学科主催・企画・制作・展示「熱帯農業の魅力」		2日～4日 収穫祭	
4月	2日 2012年度入学式(入学者162名)	11月	5日 体育祭	
	9日 前学期授業開始		17日 地域後継者推薦・卒業生子弟・指定校推薦入試	
	12日～18日 農業開発実習(第1組、東京農大宮古垂熱帯農場にて、学生45名、引率:中曽根勝重助教)		18日 一般推薦・社会人・毎日農業新聞記録賞推薦入試	
6月	2日 教育懇談会	12月	2日 併設校優先・運動選手推薦・技術練習生優先入試	
	6日～12日 農業開発実習(第2組、東京農大宮古垂熱帯農場にて、学生41名、引率:中西康博准教授・小島庸平助教)		25日～1月6日 冬季休業	
	16日 ホームカミングデー		2013年	
	29日 卒業論文題目届提出期限		1月	7日 後期授業再開
7月	14日～15日 地方教育懇談会	19日～20日 大学入試センター試験		
	22日 高校生向けワークショップ「ひらめきときめきサイエンス—ようこそ大学の研究室へ」	28日～2月1日 後学期定期試験		
	30日～8月3日 前学期定期試験	31日 卒業論文提出期限		
8月	5日～6日 キャンパス見学会	2月	3日～9日 農業開発実習(第4組、東京農大宮古垂熱帯農場にて、学生46名、引率:檜村修生教授)	
	6日～9月20日 夏季休業		6日～8日 一般入試	
9月	3日～7日 農業総合実習(1年生、厚木総合農場・伊勢原農場にて)	3月	12日 優秀卒業論文発表会	
	20日 編入学試験		15日 卒業・進級確定者発表	
			20日 卒業式	

国際農業開発学科の活躍 (学年は当時)

- *2013.06.15～16 レスリング部 平成25年度全日本選抜選手権大会(兼ハンガリー世界選手権代表選考会)【男子フリースタイル120kg級】 3位 角田友紀(開発3年)
- *2013.05.12 剣道部 第59回関東学生剣道選手権大会 ベスト16 岩江皇明(開発3年)
- *2013.04.21 社交ダンス研究部 第106回東都大学学生競技ダンス選手権大会【ラテンの部】パソドブレ 準優勝 中川卓哉(経済4年)・山田綾乃(開発4年)
- *2012.12.02 相撲部 第61回全日本相撲選手権大会【個人】準優勝 正代直也(開発3年)
- *2012.11.21～25 ボクシング部 第82回全日本アマチュアボクシング選手権大会【ミドル級】5位 助川康平(開発2年)
- *2012.11.10～11 レスリング部 第38回内閣総理大臣杯平成24年度全日本大学レスリング選手権【フリースタイル120kg級】3位 角田友紀(開発3年)
- *2012.11.10～11 相撲部 第90回全国学生相撲選手権大会【団体】ベスト8 【個人】準優勝 正代直也(開発3年)
- *2012.10.04～08 ボクシング部 第67回国民体育大会ボクシング競技会【フライ級】優勝 5位 華井玄樹(開発4年)、【ミドル級】3位 助川康平(開発2年)
- *2012.09.30～10.03 レスリング部 ぎふ清流国体【フリースタイル120kg級】3位 角田友紀(開発3年)

東京農業大学
国際農業開発学科
Department of International Agricultural Development

国際農業開発学科を目指す皆さんのページ

情報ひろば

東京農大コミュニティ BLOGが時更新中!

国際協力できる人

2007年から国際農業開発学科を志望する中高生向けに学科を分かりやすく紹介するホームページ (<http://www.nodai.ac.jp/int/develop/index.html>) を公開しました。

海外実習や国内(学内・学外)実習、教員・学生の調査の様子、研究の様子について学部生・院生・教員からの投稿記事を随時掲載中。(<http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php>)。

国際協力を志すご子弟や教え子の進学先を考えていらっしゃる方、是非一度アクセスを。

拓友会賞

異なる有機質肥料の施用が食用カンナの生育および収量に及ぼす影響

熱帯園芸学研究室 長嶋 麻美
指導教員 高橋 久光
小塩 海平
真田 篤史

本研究は、異なる有機質肥料の施用が、食用カンナの生育および収量に及ぼす影響について調査・検討を行った。その結果、以下の点が明らかとなった。

- 1) 牛糞堆肥およびミミズ糞堆肥を供試肥料として用いた食用カンナの栽培実験の結果、他の処理区と比べて堆肥中のNとKの含量が比較的高い牛糞N区が、各調査項目においていずれも高い値を示し、他の処理区との間に有意な差が認められた。
- 2) 草丈の伸長と日長時間との間に関係性が認められた。食用カンナは、日長時間が12時間以下になると、花芽分化が開始され、草丈および葉枚数の増加が停止することが明らかとなった。
- 3) 地下部収量は、施肥中のK含量が高い牛糞N区・ミミズK区・牛糞K区が、他の処理区より高い値を示したことから、土壤中のK含量が根茎の肥大に影響を与えることが明らかとなった。
- 4) 栽培期間中の2012年8月の降水量が、昨年より146.3mm減少したため、各個体全てに強い水ストレスが掛かり、地上部の生育と根茎の肥大が総じて低く抑えられた。しかし、食用カンナの澱粉含有率は、最も施肥量の多いミミズK区に次いで、無施肥区が高い値を示したことから、食用カンナは低肥料・水ストレス下でも、高い澱粉収量を維持することが明らかとなった。
- 5) 本実験において、栽培前および栽培後のECは、作物として非常に大型の食用カンナを栽培したにもかかわらず、高いまま推移したことから、食用カンナは肥料効率の良い作物であることが明らかとなった。

本学生は在学中、ミャンマー、ベトナムなどの開発途上国の農業を視察し、今回の課題も現地調査の中より探し出した。また、研究室活動にも真摯に取り組んだ。平成25年4月より国際農業開発学専攻に進学し、さらに同じテーマで研鑽を重ね開発途上国の農業開発に寄与するものと思われる。

拓友会賞(受賞者のことば)

大学院国際農業開発学専攻修士1年
長嶋 麻美

この度は、拓友会賞を頂きありがとうございました。論文を完成させるにあたり、沢山の先生や同期、後輩、家族に支えて頂いたことを、この場を借りて感謝します。私は、他大学を卒業後、陸上自衛隊で勤務していましたが、小さな頃から関心のあった植物について本格的に勉強したいと考え、農大の開発学専攻へ編入しました。しかし、農業に関しては素人同然で、初めのうちは灌水という言葉の意味すら知らない状態でした。ですから、周囲の協力なくしては栽培も、この論文を完成させることも出来なかったと思っています。

今回、私が題材とした食用カンナは、半野生半栽培の植物で、マイナークロップなどと呼ばれています。日本で言うところの茗荷や蔕のような、「どこの家の裏庭にも昔から植えてある植物」であり、ないと困るが手を掛けて育てるような植物ではなく、勝手に生えているといった感じのものです。しかし、これらマイナークロップの多くは、その地域ごとの環境や文化に深く結びついており、遺伝資源としても高い価値を内包しています。特に、2010年COP10(生物多様性条約締結国会議)が名古屋で開催されて以降、遺伝資源の価値が再評価され、その保護と開発が積極的に進められるようになりました。私もこの分野を研究する者の1人として、1つでも多くの資源植物と出会い、その価値をより多くの人々に認識してもらえるように、地道に研究を進めていきたいと考えています。

現在は、大学院国際農業開発学専攻の博士前期課程に進学し、昨年に引き続き世田谷キャンパスの用賀圃場にて食用カンナを栽培しており、様々な有機質肥料が食用カンナの生育と収量にどう影響するかを調査しています。今年は早くから猛暑日が続いたせいか、昨年よりも生育が順調で、すでに2mを越す株が続出しており、炎天下での生育調査は苦勞の連続です。しかし、日々急激に成長していく食用カンナを、調査を手伝ってくれる同期や後輩達と見上げるたび、「ただの草も只者じゃない」とつくづく考えさせられています。そして今後は、食用カンナをはじめとする多様なマイナークロップの栽培と利用について、学部生時代には出来なかった国外でのフィールドワークを交えて、さらに積極的に研究を進めていきたいと考えています。

平成24年度拓友会賞受賞卒業論文

熱帯作物保護学研究室 黒澤 千尋

指導教員 夏秋 啓子

熱帯作物保護学研究室に4年間所属し、卒業した黒澤千尋さんの卒業論文「タンザニアにおける *Rice yellow mottle virus* の発生と診断法」は、栄えある平成24年度拓友会賞を受賞した。黒澤さんは、高校生

の時からアフリカの稲作に関心を持ち、1年次から研究室に所属して、先輩学生や院生とともにRYMVの研究を行って来た。RYMVとはアフリカの稲作においてもっとも深刻な被害をもたらすウイルス、*Rice yellow mottle virus* のことである。アジアでの発生は知られないが、アフリカの稲作地帯ではどこでも発生して問題となっている。とくに近年、関心のあつまっているNERICA (New Rice for Africa) 稲の普及にあたっては、RYMVの性状解明や抵抗性品種の作出などが強く求められており、開発学科でも数年来、その研究に取り組んでいる。黒澤さんは、タンザニアの留学生2人と協力して実験を進め、さらに、3年次にはタンザニアにおいて、稲作や米の利用の状況を観察するとともに、RYMVの発生調査を体験し、



ウイルス病のイネ

標記の卒業論文を取りまとめた。現場の事情を学びながら、現場で求められている情報、どのような性状を持つRYMVが発生しているのか、どのように検出したらよいのか、耕種的防除法にはどのような提案ができるか、などを検討した。特筆すべきは、異なる栽培体系の異なる圃場から得られた600を超えるイネ乾燥標本について個別にウイルス検出を行い、RYMVの発生や拡大と栽培体系の関係を示したことである。研究成果の一部は、先輩大学院生やタンザニア人留学生らとの共同研究として学会でも報告された。黒澤さんは、留学生への助力などを含め研究室の諸活動に積極的に参加し、研究室の学生室長としては収穫祭における文化学術の部での入賞へも大きく貢献した。その眼差しは常に、タンザニアあるいは

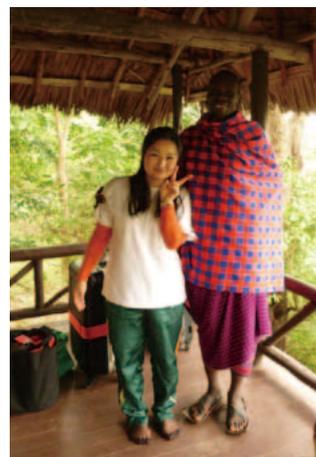
アフリカの発展に向けられてきた。研究室や国内だけにとどまらず、どこにいても農業開発の現場を忘れない拓友会の先輩諸氏に続く後輩の一人として、拓友会受賞に相応しい人材、そして卒論といえよう。



タンザニアの農家

受賞者黒澤千尋さんからのメッセージ

拓友会賞を頂きまして、本当に有難うございました。一年次から研究に取り組み、実際にタンザニアへ行きイネとそのウイルス病について卒論の調査をしたのは忘れられない思い出です。今でもアフリカの友達とはメールのやり取りをして仲良くしています。現在は食品メーカーに勤務し、穀物の加工品に関わる仕事をしています。これからも、食糧問題には関心を持って仕事を続けていきたいと思っています。



念願がなつてマサイ族の方と記念撮影

農業生産法人 (株)ライフオン

樋口 稔

(拓殖 10 期)

〒059-0272 北海道伊達市北黄金町 119-47

〒181-0004 東京都三鷹市新川 3-15-12

Tel : 0422-48-8976

Mobile : 090-3203-4950

学生による研究室紹介

—健康科学研究室—

はじめに

健康科学研究室は、国際食料情報学部教養分野のひとつとして位置づけられており、国際農業開発学科の中に所属している。本研究室は、櫻村修生教授の指導で、自然科学・医学生理学系の研究分野を中心に、広く農業・環境・健康・スポーツのキーワードがオーバーラップする分野で研究を行っている。とくに、農業従事者の健康問題、異常環境(高温・低温・低酸素)での障害に対する予防対策、開発途上国の農産物の生体への効果、スポーツ時の生体反応などを中心に研鑽を積んでいる。

研究内容

1) 熱中症発症に関する研究

日本の夏や熱帯途上国において、暑熱環境下での農作業は過酷であり、熱中症対策が急務となっている。研究室では、人を用いた暑熱曝露下作業実験と実験動物を用いた熱中症発症メカニズムの解明のため、実験を実施している。まず、人では暑熱順化状態により作業時の体温調節反応(体温や発汗など)が違ふことを解明し、本研究室出身の柏木朋也氏が日本生気象学会で若手奨励賞を受賞した。さらに、夏季の農作業時における体温調節反応について、若齢者と中高齢者を比較し、中高齢者の体温調節反応は熱中症発症の危険性が高くなっていることを発表し、日本生気象学会で研究奨励賞を受賞しており、本研究室は、農業場面での熱中症対策研究の中心的存在となっている。2013年度は、大塚製薬(株)と共同研究契約を締結し、ハウス栽培農家を中心に熱中症に関する全国調査とハウス栽培農業従事者における作業時の体温調節反応の実験が行われている。また、本学の駅伝選手においても、熱中症に既往した経験者がいることから、スポーツ時の熱中症対策として、熱中症既往者(一度熱中症に罹った経験のある者)は、再度、熱中症に罹りやすいかどうかについて研究を行ってきた。その結果、一度罹ると再度罹りやすい体(体温調節反応は悪くなる)に変化していくことが明らかになった。さらに、熱中症の研究については、ラットを用い、暑熱曝露下で各臓器を摘出し、熱ストレスタンパク(Hsp72)発現の面から、どの臓器が暑熱曝露に対して熱ストレスを受けやすいか等検討している。

2) 熱中症予防対策に関する研究

熱中症発症を予防するため、水分補給対策に関する研究はもちろんのこと、栄養食品の摂取による対策を検討している。熱中症の重症症状時に生体内でおこる脂質代謝の低下による多臓器不全に注目し、

その脂質代謝を活性化するとされるL-カルニチンの摂取により暑熱曝露下運動時の体温調節反応が改善することを明らかにした。この研究は、さらに発展し現在、L-カルニチンに代わり今世界的に注目されているオメガ3(とくに、 α -リノレン酸)を大量に含むサチャインチオイル(アマゾンナッツ)の摂取により、熱中症の予防効果が期待されている。本研究も、2013年度から日本化薬(株)との共同研究で行っている。

3) 開発途上国農産物の健康効果に関する研究

上記サチャインチオイルの研究もペルー原産の開発途上国の農産物であるが、研究室では、カムカム果汁の高血圧抑制作用、ヤムイモによる運動性遅発性筋肉痛の抑制などの研究も行っている。カムカム果汁には、多くのビタミンCとポリフェノールが含まれており、この成分が高血圧によって傷害された動脈血管内皮細胞を修復し、血管内皮細胞弛緩物質の一酸化窒素放出を増大させ、さらに血管収縮物質であるアンジオテンシンIIを減少させ、高血圧が改善されることが明らかとなっている。また、実験動物やヒトに台湾産やジャマイカ産のヤムイモを摂取させることにより、急激な運動後にしばしば発生する筋肉痛(骨格筋細胞の損傷)が、ヤムイモに含まれるディオスゲニンやアミノ酸により軽減できることを明らかにした。とくにヤムイモは、今後、スポーツ性機能食品としての利用が期待される。

4) 低酸素曝露下作業時の循環反応

開発途上国には、しばしば高地が存在する。この地域の環境は、低温・低酸素である。生体は、常に寒さと酸素の薄い環境に曝露されるが、この刺激は生体にとってかなりのダメージ(高山病など)を与える。高地に住む住民の生体調査(血液循環・特に心臓形態)を行うことにより、低温や低酸素に対する生体への影響を調査し、高地途上国での農作業時における高山病予防対策を研究している。

研究室活動

研究室では、毎週水曜日に昼食会を開いている。また、ゼミは、火曜日の4限目と水曜日の4限目に行い、学生が研究室のテーマに則り、前期は順番で研究論文の抄読会、それに加え後期は自分の卒業論文の実験結果等の報告を実施している。また、収穫祭には研究室活動の発表を行い、本学の研究室には珍しい医学生理学系の観点からの発表を行っている。

研究室の構成

研究室には、現在大学院生(博士後期課程)が3名、4年生12名、3年生12名が在籍している。それぞれ熱中症研究班、高山病研究班、スポーツ研究班に属し、研究室活動を行っている。

海外留学報告「外へ出るということ」

国際農業開発学科4年
堀 高之

私は大学1年生の終わりに、このままでは自分が
 廃れていく一方であり、一先ず自分の足で海外に出
 て、自分の目で人々の生活を確かめてしようと奮起
 しました。バックパック1つを背負い、宿を決める
 こともなく右も左も分からぬまま、タイへと向かい
 ました。

帰国後、1人の国際協力を学ぶ人間として出来るこ
 とは何か、様々な思い、考えが頭を巡り、途上国での
 活動を真剣に考え始めた矢先、高校時代の友人からネ
 パールでの学校修繕を行う学生ボランティア団体へと
 誘われました。そして2010年の夏を皮切りに、2011
 年の春、夏と3度に亘りネパールを訪れました。カ
 トマンドゥに拠点を置くNGOのスタッフと連絡を取
 り合い、視察を行い、一番のニーズに合った候補地を
 選択し、ネパールの人々と寝食を共にしながら、学校
 の修繕という1つの目的に向け、作業を行います。こ
 の過程の中で強く感じたのが、援助することは時に自
 己満足になりえ、文化、宗教、習慣など、その土地に
 あったやり方を行わなければ迷惑にもなりえることで
 す。また、人々との交流の為にはやはり言語が重要な
 ツールであること、相手の立場になって考え、一つの
 村として何を一番に欲しているのかを知るには村の
 リーダーだけでなく、立場の弱い女性や身分の低い人
 にまで時間を持って話し合いの場を持たなければなら
 ないことでした。特にネパールでは、既に民主化され、
 表向きにはカースト制度は無くなっていますが、宗教
 が日常生活に根強く入り込んでいるため、私の出会っ
 た人の中にも不可触民のカーストに位置づけられるた
 め、宗教による差別を受けざるをえない状況にある
 人々が多くいました。

今までの大学生活において、タイ、ネパールを始め
 とした5カ国以上に亘る国々を訪問しました。経済
 的に貧しい国であればあるほど、上に立つものの
 権力が大きく、本来平等に扱われるべき立場の弱い

人々の権限がないように感じました。人々が持つ人
 権が確保されている国、すべての人が平等の権利を
 有することが理想ですが、大なり小なりどの国にも
 格差や差別はあります。そこをいかに均していく
 か。いかにマイノリティーがエンパワーメントを行
 うか。膨大な時間を要することですが、とても遣り
 甲斐があり、将来この分野の職に就きたいと思わせ
 るものでした。

そして、私費留学という形で2012年の春より、カ
 ナダのトロントに滞在しました。カナダという地を選
 んだ最大の理由が、多文化主義政策を採り、多くの異
 なる国の人々と共に仕事出来る環境が整っている
 こと。そして大学を卒業する前に、海外に滞在し、仕
 事をする事で新たな進路を見出したかったからで
 す。現にカナダでは、現在でも年間に25万近くの移
 民者を受け入れ、G8の中でも人口増加率はトップで
 す。その中で、民族や人種の多様性を尊重し、すべて
 の人が平等に社会に参画できる国づくりを目指して
 います。それを現すような印象深い出来事がありました。
 それは、私がインターンシップ先を探すにあたり、履
 歴書を作成する際、決まった書式はありませんが、年
 齢、性別、出身地、顔写真、扶養者の有無、病歴など
 載せてはならない、また、面接者も聞いてはならない
 という法律があることです。仕事に直結するのは、
 個々人のスキルのみであるという至極当然のことです
 が、日本の過剰なまでの新卒偏重や、男女間での雇用
 格差を見ると日本も見習うべき部分があるように考え
 ます。インターンとして働いていたNGOでは安全な
 農産物を全ての人々に行き渡せることを目的にして
 おり、食文化の違う人々への特定の農産物配達も行っ
 ていました。日本で暮らしていると普段、日本人と意識
 する場面は少ないかと思いますが、カナダでは否が
 にも意識させられることが多々ありました。そして日
 本の良い面、悪い面も自ずと再認識します。人権とは
 何か、またいかに日本、途上国におけるその平等性
 を上げることができるのか、今までの生活の中で得た
 ものを踏まえ、考察していきます。



おいしさは愛。

ハム工房ぐろーはるのハム&ソーセージは、《和豚もちぶた》を100%使用し
 ひとつひとつ手間と時間をかけてつくられます。

ハム工房
ぐろーはる

〒377-0052 群馬県渋川市北橘町上箱田800
 TEL 0279-52-3746 FAX 0279-52-3581
 フリーダイヤル 0120-44-3746

グローバルピクニックファーム株式会社

代表取締役 赤地 勝美 (昭和39年卒業)
 URL <http://www.gpf.co.jp>

拓友会 第29号 2013年9月30日号

第53期 一般会計収支決算

一般会計	(平成23年10月1日～平成24年9月30日)		
	予算	決算	差異
収入の部			
1. 会費	1,740,000	1,730,000	▲10,000
卒業生	1,740,000	1,530,000	▲210,000
既卒者	0	200,000	200,000
2. 事業	500,000	386,000	▲114,000
ニュース広告	320,000	210,000	▲110,000
行事等収入	180,000	176,000	▲4,000
3. 寄付金等雑収入	150,000	72,000	▲78,000
4. 前年度繰越	184,300	184,300	0
合計	2,574,300	2,372,300	▲202,000

	予算	決算	差異
支出の部			
1. 事業支出	1,180,000	1,105,814	▲74,186
総会費	180,000	180,000	0
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	400,000	373,000	▲27,000
拓友会賞	100,000	52,814	▲47,186
在校生への補助	200,000	200,000	0
2. 管理費	1,030,000	698,318	▲331,682
会議費	100,000	86,860	▲13,140
印刷費	100,000	0	▲100,000
交通費	50,000	34,000	▲16,000
通信費	500,000	453,298	▲46,702
消耗品費	100,000	6,160	▲93,840
雑給費	80,000	60,000	▲20,000
雑費	100,000	58,000	▲42,000
3. 特別会計積立金	300,000	300,000	0
4. 予備費	64,300	0	▲64,300
5. 次年度繰越金	0	268,168	268,168
合計	2,574,300	2,372,300	▲202,000

特別会計

	予算	決算	差異
収入の部			
1. 前年度繰越	1,423,313	1,423,313	0
2. 一般会計より繰入	300,000	300,000	0
合計	1,723,313	1,723,313	0
支出の部			
1. 次年度繰越金	1,723,313	1,723,313	0
合計	1,723,313	1,723,313	0

第54期 一般会計収支予算

一般会計	(平成24年10月1日～平成25年9月30日)		
	53期	54期	差異
収入の部			
1. 会費	1,740,000	2,210,000	470,000
卒業生	1,740,000	2,010,000	270,000
既卒者	0	200,000	200,000
2. 事業	500,000	500,000	0
ニュース広告	320,000	320,000	0
行事等収入	180,000	180,000	0
3. 寄付金等雑収入	150,000	50,000	▲100,000
4. 前年度繰越	184,300	268,168	83,868
合計	2,574,300	3,028,168	453,868

	53期	54期	差異
支出の部			
1. 事業支出	1,180,000	1,180,000	0
総会費	180,000	180,000	0
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	400,000	400,000	0
拓友会賞	100,000	100,000	0
在校生への補助	200,000	200,000	0
2. 管理費	1,030,000	1,150,000	120,000
会議費	100,000	100,000	0
印刷費	100,000	100,000	0
交通費	50,000	50,000	0
通信費	500,000	500,000	0
消耗品費	100,000	150,000	50,000
雑給費	80,000	100,000	20,000
雑費	100,000	150,000	50,000
3. 特別会計積立金	300,000	300,000	0
4. 予備費	64,300	398,168	333,868
合計	2,574,300	3,028,168	453,868

特別会計

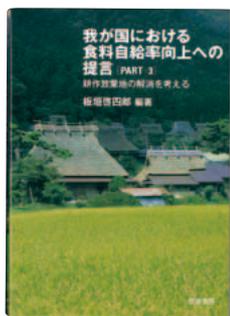
	53期	54期	差異
収入の部			
1. 前年度繰越	1,423,313	1,723,313	300,000
2. 一般会計より繰入	300,000	300,000	0
合計	1,723,313	2,023,313	300,000
支出の部			
1. 次年度繰越金	1,723,313	2,023,313	300,000
合計	1,723,313	2,023,313	300,000

開発学科教員の著書紹介

『我が国における食料自給率向上への提言』 【PART-3】 耕作放棄地の解消を考える

板垣 啓四郎 編著
筑波書房、2000円

東京農業大学総合研究所では、研究プロジェクト予算により、チームを編成して食料自給率向上に関する提言について過去5年間精力的に研究を進め、出版によってその成果を公にしてきた。本書は2012年度の研究成果として公刊されたものである。本書ではとくに耕作放棄地の解消により自給力および自給率の向上を提言する方向をまとめた。



現在、我が国の耕作放棄地は40万haにもおよび、総耕地面積の実に9%近くは放棄されている。こうした耕作放棄地を有効活用してそこに自給率の低い作物(麦類、大豆、飼料作物など)を栽培していけば、自ずと自給率が高まっていくはずであるが、なかなかそうはいかない。それには少なくとも3つの理由がある。第1に耕地の形状が不整形で狭隘なこと、第2に耕地へのアクセスが悪くまた市場へも遠隔であること、第3にそのために機械化など省力技術の利用効率が低いことである。要するに、中山間地域にある耕作条件の不利なところで耕作放棄地が広がっている。ここでは、就農者の高齢化が進んで後継者の確保がむずかしく、鳥獣害を受けやすいなど就農の継続が困難である。長年耕作が放棄されていけば、そこが森林や荒野と化して耕作地として回復することはきわめてむずかしい。回復困難な地域が次第に広がり示しつつあることが事態を深刻なものにしている。耕作放棄地は土地持ち非農家が多い。こうした農地は地籍がはっきりせず相続の法的手続きが遅滞していることがしばしば起こる。この

ような状況のもとで、現在政府が進めているのが「農地集積バンク」の創設、すなわち都道府県単位で設置する「農地中間管理機構」が離農農家の農地や耕作放棄地などの利用権を取得し、地域の中核となる農業経営者にまとまった形で貸し出す仕組みであるが、これが首尾よく機能するかどうかおおいに疑問とされるところである。

耕作放棄地が農地として復活していったところは、基盤整備が進み水利の便がよいところがほとんどである。また農地を集落単位で経営意欲の高い農業者へ集積する仕組みが出来上がっているところである。耕作放棄地を解消するためには、そうした優良事例の経験を積み重ねていくことが肝要である。本書はそうした事例を全国レベルから集めて紹介している。

食と農の博物館から

食と農の博物館は、東京農業大学における日頃の教育と研究成果を、社会に発信しているユニークな体験型博物館です。2013年度後期の展示は下記の通りです。お誘いあわせの上、お楽しみください。

❖『醸造のふしぎ』—微生物が醸す世界—展 【常設展示】

会期：2012年3月30日～2014年3月23日
主催：応用生物学部醸造学科、短期大学部醸造学科

❖『樹木の形の不思議』展

会期：2013年10月1日～2014年3月16日
主催：短期大学部環境緑地学科

❖国際キヌア年特別展示「アンデスからの贈り物」

会期：2013年5月8日～晩秋(キヌアの収穫時期)

❖細川健太郎写真展「乾きに生きる植物たち—南部アフリカ・世界でもっとも豊かな砂漠—」

会期：2013年7月21日～2014年8月9日
主催：(財)進化生物学研究所

❖『衛星からのアジア東岸域のモニタリング』展

会期：2013年8月24日～2013年9月23日
主催：東京情報大学環境情報学科

(図書館運営委員：杉原たまえ)



食の検定®

<http://www.syokuken.jp>

「国際農業開発学科」の先生方に支えられて運営しています。
食の検定協会

「拓友会ニュース」広告募集中

「拓友会ニュース」では、ニュースに掲載する広告を募集しています。
広告のサイズと料金は以下のようになっています。

- | | |
|-----------------|-----|
| 1. 名刺サイズ | 2万円 |
| 2. 名刺2枚サイズ(中入り) | 3万円 |
| 3. 名刺2枚サイズ(裏表紙) | 5万円 |

広告の掲載を希望される方は、下記へご一報いただければ幸いです。

TEL: 03-5477-2420 FAX: 03-5477-4032

E-mail: k-ita@nodai.ac.jp 国際農業開発学科 板垣 啓四郎